

乳児保育（0、1、2歳児の保育）における 領域「環境」の内容についての考察

—新保育所保育指針にもとづいて—

横井一之*

平成30年4月より、幼稚園教育要領（以下新教育要領）、保育所保育指針（以下新保育指針）そして幼
保連携型認定こども園教育・保育要領（以下新教育・保育要領）が（告示：平成29年3月31日）実施さ
れる。現行の保育所保育指針では、領域「環境」に関するねらい3項目、内容12項目は8区分すべての
発達過程に適応され、養護に関するねらい8項目、内容8項目を加味して、保育内容が構成されている。
新保育指針では、特別に章を設けて発達過程が示されず、保育の内容の中で対象を「乳児保育」「1歳以
上3歳未満児」「3歳以上児」と区分し、発達については「基本的事項」の中で触れている。

また、領域「環境」について新教育要領、新保育指針の「3歳以上児」区分そして新教育・保育要領の
「満3歳以上の園児」区分のねらいと内容については3者とも同じ文言となり、内容については現行の
教育要領の（5）番目の後に1項目加わり、全部で12項目となり統一された。現行保育指針の内容は12項
目あり、内容の文言、項目数は3者で差異があり、不揃いであった。ただし、3者は別々の経緯で編集さ
れてきたので、このことは極自然なことだと思われる。

本稿では、新保育指針の改定にあたり乳児保育（0歳児の保育：筆者補足）、そして1歳以上3歳未満
児の保育のねらいと内容について、すべての年齢のねらいと内容と並べてその特徴を示す。また、改定に
より予想される乳児保育（0、1、2歳児の保育）における領域「環境」の保育内容について具体的な展開
例を示して考察する。

1. 乳児保育について

児童福祉法第4条に「……一 乳児 満一歳にみたない者……」と明記されている。しかし、保育
士が活躍する現場、保育所、乳児院等では、そして保育士養成課程では「幼児保育」（3歳以上の保育）に
対して、「乳児保育（0、1、2歳児の保育）」という言葉を用いている。

一方、現行保育指針では、第3章 2 保育の実施上の配慮事項で、(2) 乳児保育に関わる配慮事項、(3)
3歳未満児の保育……、(4) 3歳以上児の保育……と新保育指針と同じ区分をしている。現行保育指
針では、第2章で8つの発達過程を示しているが、以上のことをまとめると表1のようになる。

保育現場では今後も表1左段のように言葉が用いられると考えられる。

2. 乳児保育における領域「環境」の変遷

保育指針は1965（昭和40）年のものから今回の新保育要領が第4次改定となるが、厚生労働省告示と
なったのは現行保育指針2008（平成20）年の第3次改定からである。保育内容については、現行保育指
針では、表2のように全年齢区分に同じ保育内容、養護と教育が一体となった指導を行っている。新保育

* 東海学園大学教育学部教授

表1 発達過程区分の変遷

保育士養成課程及び保育現場	現行の保育所保育指針（発達過程）	新保育所保育指針
乳児保育（0、1、2歳児の保育）	おおむね6か月未満	乳児保育（0歳児の保育）
	おおむね6か月から1歳3か月未満	
	おおむね1歳3か月から2歳未満	1歳以上3歳未満児の保育
	おおむね2歳	
幼児保育（3歳以上児の保育）	おおむね3歳	3歳以上児の保育
	おおむね4歳	
	おおむね5歳	
	おおむね6歳	

指針では、表3のように保育内容は年齢区分で3つに分けられ、乳児保育（0歳の保育）では教育分野の領域は「健やかに伸び伸びと育つ」「身近な人と気持ちが通じ合う」「身近なものに関わり感性が育つ」の3つに分かれている。1歳児以上3歳未満児の保育となり領域「環境」へ接続する領域は第3番目で、その領域名からも分かるように領域「環境」と領域「表現」が融合した名称である。

現行保育指針の領域「環境」のねらいと内容は表4のようである。新保育指針の領域「環境」等のねらいと内容は表5-1～表5-3のようである。

表2 現行の保育所保育指針（2008（平成20）年告示）の各項目数

全年齢区分 分類	養護		教育・5領域				
	生命の保持	情緒の安定	健康	人間関係	環境	言葉	表現
ねらい（項目数）	4	4	3	3	3	3	3
内容（項目数）	4	4	9	14	12	12	10

表3 新保育所保育指針（2017（平成29）年告示）の各項目数

乳児保育（0歳） 分類	養護（全年齢共通）		教育・3領域				
	生命の保持	情緒の安定	健やかに伸び伸びと育つ	身近な人と気持ちが通じ合う	身近なものに関わり感性が育つ		
ねらい（項目数）	4	4	3	3	3		3
内容（項目数）	4	4	5	5	5		5
1、2歳児の保育 分類	養護（全年齢共通）		教育・5領域				
	生命の保持	情緒の安定	健康	人間関係	環境	言葉	表現
ねらい（項目数）	4	4	3	3	3	3	3
内容（項目数）	4	4	7	6	6	7	6
3歳以上の保育 分類	養護（全年齢共通）		教育・5領域				
	生命の保持	情緒の安定	健康	人間関係	環境	言葉	表現
ねらい（項目数）	4	4	3	3	3	3	3
内容（項目数）	4	4	10	13	12	10	8

新教育要領・新保育指針・「新教育・保育要領」では3歳児以上の保育内容が統一された。

表4 現行の保育所保育指針のねらいと内容

ねらい
①身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心を持つ。
②身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。
③身近な事物を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊か

にする。

内容

- ①安心できる人的及び物的環境の下で、聞く、見る、触れる、嗅ぐ、味わうなどの感覚の働きを豊かにする。
- ②好きな玩具や遊具に興味を持って関わり、様々な遊びを楽しむ。
- ③自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
- ④生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心を持つ。
- ⑤季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
- ⑥自然などの身近な事象に関心を持ち、遊びや生活に取り入れようとする。
- ⑦身近な動植物に親しみを持ち、いたわったり、大切にしたり、作物を育てたり、味わうなどして、生命の尊さに気付く。
- ⑧身近な物を大切に作る。
- ⑨身近な物や遊具に興味を持って関わり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。
- ⑩日常生活の中で数量や図形などに関心を持つ。
- ⑪日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心を持つ。
- ⑫近隣の生活に興味や関心を持ち、保育所内外の行事などに喜んで参加する。

3.乳児保育（0、1、2歳児の保育）の具体的展開について

3.1.乳児保育（0歳）の領域「身近なものに関わり感性が育つ」について

この領域のねらいと内容は1歳以上の領域「環境」と「表現」につながっている。表5-1に「もの」とあるのは、0歳児は認知能力が十分に育っていないので「人」と「物」の区別が明確にできないので身の回りの「人」や「物」を「もの」と表現している。ここで取り上げられているねらいと内容は、保育所保育指針（1999（平成11）年）第4章「6か月から1歳3か月未満児の保育の内容」に参照できるものがある。但し、その中ではねらいや内容が3つの領域に分けられていない。

3.1.1.内容①の保育実践例

表5-1 新保育所保育指針のねらいと内容（乳児保育（0歳児の保育））

領域「身近なものに関わり感性が育つ」

ねらい

- ①身の回りのものに親しみ、様々なものに興味や関心をもつ。
- ②見る、触れる、探索するなど、身近な環境に自分から関わろうとする。
- ③身体の諸感覚による認識が豊かになり、表情や手足、体の動き等で表現する。

内容

- ①身近な生活用具、玩具や絵本などが用意された中で、身の回りのものに対する興味や好奇心をもつ。
- ②生活や遊びの中で様々なものに触れ、音、形、色、手触りなどに気付き、感覚の働きを豊かにする。
- ③保育士等と一緒に様々な色彩や形のものや絵本などを見る。
- ④玩具や身の回りのものを、つまむ、つかむ、たたく、引っ張るなど、手や指を使って遊ぶ。
- ⑤保育士等のあやし遊びに機嫌よく応じたり、歌やリズムに合わせて手足や体を動かして楽しんだりする。

表5-2 新保育所保育指針のねらいと内容（1歳以上3歳未満児の保育）

<p>領域「環境」</p> <p>ねらい</p> <p>①身近な環境に親しみ、触れ合う中で、様々なものに興味や関心をもつ。</p> <p>②様々なものに関わる中で、発見を楽しんだり、考えたりしようとする。</p> <p>③見る、聞く、触るなどの経験を通して、感覚の働きを豊かにする。</p> <p>内容</p> <p>①安全で活動しやすい環境での探索活動等を通して、見る、聞く、触れる、嗅ぐ、味わうなどの感覚の働きを豊かにする。</p> <p>②玩具、絵本、遊具などに興味をもち、それらを使った遊びを楽しむ。</p> <p>③身の回りの物に触れる中で、形、色、大きさ、量などの物の性質や仕組みに気付く。</p> <p>④自分の物と人の物の区別や、場所的感覚など、環境を捉える感覚が育つ。</p> <p>⑤身近な生き物に気付き、親しみをもつ。</p> <p>⑥近隣の生活や季節の行事などに興味や関心をもつ。</p>
--

表5-3 新保育所保育指針のねらいと内容（3歳以上児の保育）

<p>○ 3歳以上児の保育（新教育要領、新保育指針、新教育・保育要領で共通：⑫は施設名を入替）</p> <p>ねらい</p> <p>①身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。</p> <p>②身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。</p> <p>③身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。</p> <p>内容</p> <p>①自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。</p> <p>②生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。</p> <p>③季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。</p> <p>④自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。</p> <p>⑤身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。</p> <p>⑥日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。</p> <p>⑦身近な物を大切にすること。</p> <p>⑧身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。</p> <p>⑨日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。</p> <p>⑩日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。</p> <p>⑪生活に関係の深い情報や施設などに関心をもつ。</p> <p>⑫保育所内外の行事において国旗に親しむ。</p>
--

①「身近な生活用具、玩具や絵本などが用意された中で、身の回りのものに対する興味や好奇心をもつ。」ある0歳児の保育室（吉田 2010）では、腹這いになれない子どもを対象にして①吊りおもちゃ（ゴムひもに鮮やかな布を付けたたり、フェルトやタオル地で作った人形を付ける）、②（みかん箱大の）段ボー

ル箱（美しい布が貼ってあり、中に入って遊んだり、押したりして遊ぶ）、③おもちゃ箱（市販のリングの起き上がりこぼし、ミルクの空缶でつくった起き上がりこぼし、重りを入れた全面動物の顔、タオル地の鶏親子（お腹にひよこが入る））、④りんごの木（面ファスナーでりんごを取ったり付けたりできる）が用意されている。

3.1.2. 内容②の保育実践例

②「生活や遊びの中で様々なものに触れ、音、形、色、手触りなどに気付き、感覚の働きを豊かにする。」

この指導に適したおもちゃとして、いたずらボックスがある（吉田 2010）。長辺25cm大のピアノ様のボックスで、鍵盤の位置に4つのキーがある。左から1つめは電話のダイヤルである。回すとジジジと音を出して元に戻る。2つ目は四角いボタン。押すとブーと音がでる。3つ目は十字のダイヤル。不思議なことに、回すこともできるし、上下左右に押すこともできる。子どもはいろいろな手指の動きを楽しむこととなる。最後が三角のボタン。押すと空気の力でピューと音がでる。そして、それぞれのキーの上には、ちょうどピアノの弦がはってあるところに4つの窓がある。窓には、扉があり、1つ1つネジで窓が閉じている。子どもが指で扉を回転させて開けると、左から順に中からネズミ、ウサギ、ネコ、イヌが顔を出す。

3.1.3. 内容③の保育実践例

③「保育士等と一緒に様々な色彩や形のものや絵本などを見る。」

市販のものに限らず、保育者が自作の教材を作ることも可能である。多種の色合いのビニル布を用いて色を重ねる遊びをする。いろいろな形のブロックを、同じ型の穴を見つけてそこからボックスの中に入れる玩具も市販されている。絵本は、文字が読めない時期ではあるが、あまりこだわらずに、いろいろな動物、食べ物、自動車など分かりやすいものが描かれている絵本を、子どもとの触れ合いを大切に読みたい。

3.1.4. 内容④の保育実践例

④「玩具や身の回りのものを、つまむ、つかむ、たたく、引っ張るなど、手や指を使って遊ぶ。」

ここでは、3.1.1. で用意された玩具等を用いて具体的に遊ぶ。

3.1.5. 内容⑤の保育実践例

⑤「保育士等のあやし遊びに機嫌よく応じたり、歌やリズムに合わせて手足や体を動かして楽しんだりする。」

この内容は、領域「表現」に関係が深いと考えられる。

3.2.1 歳以上3歳未満児の保育の領域「環境」について

保育指針（1999（平成11）年）第4章「6か月から1歳3か月未満児の保育の内容」には、領域「環境」としての表記でなく、18項目ある全体の内容のうち（13）～（15）の3項目が領域「環境」に関連する内容である。同じく、第5章「2歳児の保育の内容」も領域「環境」としての表記でなく、17項目ある全体の内容のうち（9）～（12）の4項目が領域「環境」に関連する内容である。

3.2.1. 内容①の保育実践例

①「安全で活動しやすい環境での探索活動等を通して、見る、聞く、触れる、嗅ぐ、味わうなどの感覚の働きを豊かにする。」

春のある朝のお散歩で、チョウチョが黄色いアブラナの花に近寄っていることを見る。そして、クマバチがブーンと音を立てて花の周りを飛び回るのを聞く。ヤエムグラは触ってもチクリとしないが、洋服には勲章のようにくっつく。嗅いでみると、いいにおいのある花もあるし、小さくてあまりよいにおいでないヘクソカズラという雑草もある。園亭の茱萸の実を口にして「酸っぱい」と言う。秋には甘い柿を保育者に向いてもらい食べる。サツマイモの芳ばしい美味しさも味わう。時に嫌いだったトマトも、園庭で採った

ものだから食べてしまった、保育所ならではのエピソードも多い。

3.2.2. 内容②の保育実践例

②「玩具、絵本、遊具などに興味をもち、それらを使った遊びを楽しむ。」

砂場ではままごと遊びの食器類、シャベル、スコップ、ジョーロ、バケツなどの玩具を用いて遊ぶ。保育室ではブロックで遊んだり、電車のおもちゃを走らせて遊ぶ子どももいる。絵本はまだ読んでもらう機会の方が多い時期ではあるが、自分から絵本を開いて絵を中心に見ることを増やしたい。遊具の遊びが活発になり、小さなものなら自分から滑り台を滑ろうとし、ブランコは自分ではまだ上手くこげないものの、後ろから押しもらい大人と関わりながら揺れることを楽しめるようになってくる。

3.2.3. 内容③の保育実践例

③「身の回りの物に触れる中で、形、色、大きさ、量などの物の性質や仕組みに気付く。」

砂場でままごとをしたり、山を作ったりする中で、砂には平たくキラキラ光るもの（ウンモ）、ガラス状で大きく透明な粒（セキエイ）、細かく白い砂（チョウセキ）があることに気付く。また、何度も砂を器に入れたり、器から出したりする中で砂の量感を身につける。

3.2.4. 内容④の保育実践例

④「自分の物と人の物の区別や、場所的感覚など、環境を捉える感覚が育つ。」

ままごと遊びでいろいろな役を行い、自分の食べ物、人の食べ物が分かって遊ぶことができる。また、ごっこ遊びが終わった後は、使った物を所定の位置に戻すことができる。

3.2.5. 内容⑤の保育実践例

⑤「身近な生き物に気付き、親しみをもつ。」

ウサギやインコを直接触ることはできないが、保育者や年上の子どもに助けられながら、動物に接することができる。

3.2.6. 内容⑥の保育実践例

⑥「近隣の生活や季節の行事などに興味や関心をもつ。」

おひな祭りや端午の節句等の行事に、年上の子どもと一緒に参加する。

4. 考察

今回の保育指針改定の趣旨によると、改定の中で特に大事なものは以下の2つである。

表6 保育所保育指針2017改定のポイント

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1. 乳児（0歳）の保育のねらいや内容、そして1歳以上3歳未満児の保育のねらいや内容について充実する。2. 保育所が「幼児教育施設」として認められ、3種の施設で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が設定された。それに向けて、幼稚園から高校までを通して伸びて行く資質・能力の三つの柱を見通して幼児教育に臨む。 |
|---|

乳児保育には、乳児保育（0歳児）と乳児保育（0、1、2歳児）と2種類の（ ）付のものがある。前者は児童福祉法に則っている。保育指針は児童福祉法に基づいて制定されているので、この立場を採用。「最新保育用語辞典」（森上史朗1998）によると、「乳児とは厳密には出生から1歳未満の0歳児を指す。したがって正しくは次項の「0歳児保育」をいうべきであるが、児童福祉法制定以前の昭和初期から、0、1、2歳児の保育を「乳児保育」と称してきた慣習もあって混同している場合がある。（以下略）」という。今後も、3歳未満の保育は「乳児保育（0、1、2歳児の保育）」と表記する必要がある。

今回の幼児教育の3つの法令の改訂(定)では、「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」が設けられた。領域「健康」「人間関係」「言葉」では姿をその領域に関連付けて表記してあるが(無藤隆他 2017)、領域「環境」については関連付けていない。しかし、「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量・図形、文字等への関心・感覚」は領域「環境」に非常に関わりが深い姿だと筆者は考える。

今回乳児保育(0歳児の保育)では、領域「環境」が用いられず、領域「環境」と「表現」が合わさった領域「身近なものとの関わり感性が育つ」が設定された。発達が未分化な時期なので、適切な設定だと筆者は考える。

第3章に乳児保育の具体的展開を載せたが、1歳以上3歳未満児の保育においては引き続き領域の内容が鮮明に分化していないので、乳児保育(0歳児保育)と同じく領域「身近なものとの関わり感性が育つ」のまま扱った方が良いと筆者は考える。この点、次回の改定でも動きがあるかもしれない。これらのことも含め、今後とも乳児保育(0、1、2歳児の保育)の動向に注意を向けて行きたい。

引用文献・参考文献

厚生労働省(2008)「保育所保育指針解説書」フレーベル館

厚生労働省児童家庭局(1999)「保育所保育指針」フレーベル館

武藤隆・汐見稔幸・砂上史子(2017)「ここがポイント! 3法令ガイドブック」フレーベル館

森上史朗他(1998)「最新保育用語辞典」ミネルヴァ書房

吉田淳・横井一之(2010)「保育実践を支える環境」福村出版

